

市民プレス

SHIMIN PRESS

7月5日 第65号

2014年(平成26年)

発行人 原昭二
編集人 デジタル工房
制作 hara@camelianet.com
E-mail 090(3048)5502
TEL 2-4-43
〒353-0004 埼玉県志木市本町

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com
「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
http://pr-shimin.camelianet.com
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
南北朝と足利政権
その確執は-東国を戦乱の巷に! (その一)
建武政府の機構・・・新政の混乱と瓦解
- PAGE 2
南北朝の併立 尊氏は征夷大将軍に
足利尊氏の出自/菩提寺 天龍寺船の派遣
- PAGE 3
幕府滅亡後の鎌倉は・・・
関東執事の任命 南北朝の行方・・・
足利氏の二元的体制・・・ 観応の擾乱
直義は南朝方に・・・ 正平の一統は・・・
- PAGE 4
羽根倉合戦 足利直義は急死
行宮の在った吉野山 南朝の後村上天皇は
足利尊氏は死去する

南北朝と足利政権

その確執は 東国を戦乱の巷に!

後醍醐天皇の復讐

東国では、新田義貞によって幕府軍は壊滅し、都の優先機関だった六波羅探題は消滅した。後醍醐天皇は京都に戻り、念願が叶って天皇自らの政治に親政を再開した。天皇の新政は、「建武の新政」といわれる。元弘三年(1333)六月のことである。但し翌年(1334)は「建武」と改められたので、建武を冠した新政と呼ばれる。

改元によって年号は交錯する

元徳三年(1332)に遡り、改元について付記しておく。

後醍醐天皇を中心とする倒幕計画が発覚し、八月、幕府による厳しい追及が行なわれた。このとき後醍醐は「元徳」から「元弘」へと改元して武家政権に詔書を下す。だが幕府はこれを認めず、「元徳」を使い続けたが、鎌倉政権が滅亡に至るまで争った戦乱は、「元弘の乱」と呼ばれている。

後醍醐は、比叡山に向かうと見せかけて山城国笠置山で挙兵したが武家政権に捕えられ、九月、後醍醐天皇の皇太子が皇位を継承し、光厳天皇(のち南朝が樹立される)、「北朝」初代の天皇が即位する。光厳天皇は、持明院統の後伏見天皇の第三皇子、量仁親王で、後

歴史を紐解く

自らの廃位を否定して・・・

北条氏の六波羅探題が消滅し、元弘三年/正慶二年六月、京都に帰還して内裏に入った後醍醐天皇は、光厳天皇の皇位を否定、光厳朝で行なわれた人事を全て無効にする。また自らの「廃位」と「復位」を否定、文保二年(1338)から継続して在位していたと主張した。

建武政府の機構

摂政・関白を廃して親政が開始される。また、持明院統のみならず、大覚寺統の嫡流である邦良親王の遺児たちをも皇位継承から外し、本来傍流であった管の自分の皇子恒良(つねなが)を皇太子に立て、父の遺言を反故にして、

自らの子孫により皇統を独占する意思を明確にした。後醍醐の新政によって・・・足利高氏は後醍醐天皇から勲功を認められて従四位下に叙され、鎮守府將軍・左兵衛督(兵衛府の長官)に任じられて三十箇所の所領を与えられた。また、このとき、天皇の諱「尊治」から一字が与えられ、「高氏」の名前を「尊氏」と改めた。「高氏」という元の名前は、嘉元三年(1305)足利貞氏存する「南北朝時代」へと続く。の次男として生まれたとき、足利家の慣例に従って、得宗・北条高時の偏諱(功績のあった臣下などに自分の名の一字を与える)を受けたものである。

建武の新政の混乱

天皇専制を目指す「建武の親政」は意欲的に進められたが、性急な改革、恩賞の不公平、朝令暮改を繰り返す法令や政策のため、貴族・大寺社から武士にいたる広範な勢力の既得権が侵害された。そのため訴訟や恩賞請求が殺到した。それらへの対応の不備、増税を財源とする大内裏建設や紙幣発行計画のような非現実的な経済政策は、政権批判へと繋がっていった。

武士勢力の不満が大きかった

武士勢力の不満が大きかっただけでなく、公家達の多くも政権に冷やかな態度をとり、八月ころ、新政下の混乱した世相を風刺する二条河原落書が現われる。その無能振りが批判された。

村上源氏の流れを汲む名門に生まれ、公卿に昇進して後醍醐天皇の篤い信任を得た。内大臣となって恩賞方や雑訴決断所の頭人を任された吉田定房、同じく雑訴決断所の頭人を務めた万里小路宣房と合わせて「後の三房」と呼ばれる。一方、尊氏の弟の直義は、建武の新政で左馬頭に任じられ、鎌倉府將軍成良(なりなが)とも親王を奉じて鎌倉に駐屯する(鎌倉將軍府の成立)。

六波羅探題の攻撃で戦功を挙げた護良(もりなが)とも親王は、建武の新政で征夷大将軍、兵部卿に任じられたが、討幕の功労者足利尊氏とは相容れず、尊氏を牽制する。また、後醍醐天皇とも反目したため、征夷大将軍の職を解任された。さらに皇位篡奪(奪取)を企てたとして捕えられる。護良は同年の冬、鎌倉に配流され、ついに鎌倉の將軍府に在った尊氏の弟直義の監視下に置かれた。

武士に対する恩賞は・・・
建武の新政での恩賞や土地の所有権確定は論旨第一主義、つまり天皇の決定を記した文書が最優先で、過去の経緯などは軽視、または無視された。そのため、公家・寺社と比べると、武士に対する恩賞は公正とはいえなかった。

新政の瓦解
朝廷が武士の要求に対して応えられないならば、朝廷には従わず、彼らの利害に適う新しい機構を望む事態となる。武家政権を復活したい、但しそれは、かつての鎌倉政権の中核だった、得宗を中心とする北条氏の「一門を主とするのではない。北条の御内人といえども、すでに消滅してしまつた。そこで生き残つた武家の期待は、今や棟梁となつた足利尊氏へと向かい、高まつて行つた。彼はついに、建武の新政権に反旗を翻す。

中先代の戦い

建武二年(1336)七月、信濃国で、北条高時の遺児、時行を擁立した北条氏残党の反乱が起こつて、時行の軍勢は鎌倉を一時占拠する(中先代の乱。「中先代」とは、先代の北条氏と後代の足利氏との間の意。直義は鎌倉を脱出したが、そのとき、独断で護良を殺害した。一方、尊氏は後醍醐天皇に征夷大将軍の官職を望んだが許されず、八月、天皇の許可を得ないまま尊氏は、軍勢を率いて鎌倉に向かう。後醍醐は、已むなく尊氏に征東將軍の号を与えたので、直義の軍勢と合流して、相模国箱根、相模川の戦いで時行を駆逐し、鎌倉を奪回した。天皇に叛旗を・・・

尊氏はそのまま鎌倉に本拠を置いて独自に恩賞を与え、上洛の命令をも拒んで、武家政権を創始する動きを見せ始める。十一月、尊氏は新田義貞を君側の奸(悪い家臣)として、その討伐を後醍醐に要請するが、天皇は逆に義貞に対して、彼が奉ずる尊良(たかなが)とも親王とともに、尊氏を討伐するよう命じた。

一方、義良親王を奉じて陸奥国に下向し、鎮守府將軍に任ぜられた北畠顯家が奥州から南下を始め、そこで尊氏は後醍醐との関係修復する挙に出た。赦免を求めて隠居を宣言し、寺に籠って断髪したが、尊氏の側近であつた高師直や弟の直義など、足利方が各地で劣勢となつたので、彼らを救うため、尊氏は一転して天皇に叛くことを決意する。

足利尊氏は都にのぼる
十二月、尊氏は新田軍を箱根・竹ノ下の戦いで破り、京都に向かって進軍を始める。建武三年(1336)正月、尊氏は入京を果たし、後醍醐天皇は比叡山へ退く。しかは奥州の兵を引き連れ、わずかに十六日という驚異的なスピードで駆けつけた北畠顯家の軍勢と、楠木正成・新田義貞の攻勢に曝され、敗れた尊氏は篠村八幡宮(現・京都府亀岡市)に撤退、京都奪還を図る。二月、摂津国「豊島河原(現・大阪府箕面市/池田市)」の戦いで、後醍醐側の新田義貞、北畠顯家たちと争う。『太平記』によれば、足利直義が率いる十六万の軍勢と、新田・北畠軍約十万が対峙したという。しかし、合戦に見切りをつけた尊氏は、京都を放棄して九州に下つた。

九州に下つて再び都へ

西下した尊氏は、筑前国で宗像氏範の支援を受け、「多々良浜(現・福岡市東区)の戦い」で天皇方の菊池武敏らを破る。勢力を立て直した尊氏は、都に向かう途中、光厳上皇の院宣を得、西国の武士を急速に傘下に集めて東上した。五月の「湊川(摂津国湊川は現・神戸市)の戦い」で新田義貞・楠木正成の軍を破り、六月には京都を再び制圧する。楠木正成はこのとき自害したと伝えられている(二月、建武から延元に改元されたので、この戦いは「延元の乱」といわれる)。

足利氏の武家政権が発足
八月、後伏見天皇の皇子、豊仁親王が、光厳上皇の院宣により即位した(北朝二代の光明天皇。足利氏は比叡山に逃れていた後醍醐に和議を申し入れ、これに応じた天皇は、延元元年(南朝)／建武三年(1336)十一月、光明天皇に神器を譲つた。

尊氏は、その直後に「建武式目」十七条を定めて政権の基本方針を示し、新たな武家政権の成立を宣言する。源頼朝と同じく権大納言に任じられ、自らを「鎌倉殿」と称した。このとき、足利氏の政権は事実上発足したことになる。



絹本着色 後醍醐天皇御像(国宝)
清涼光寺 神奈川県藤沢市 蔵

幕府滅亡後の鎌倉は・・・

関東執事の任命

元弘三年(1133)に遡る。後醍醐の新政が始まった翌年、建武政権は「鎌倉将軍府」を設置し、足利直義が実権を握った。建武二年(1135)、北条高時の遺児北条時行が鎌倉を占拠した(中先代の乱)が、尊氏は八月、時行を駆逐して鎌倉に入った。十二月、尊氏は建武政権と袂を分かつて都に向かい、嫡男の義詮(のち二代将軍)を鎌倉に残す。

南北朝の行方・・・

延元四年/暦応二年(1139)八月に即位した南朝二代の後村上天皇は、若年ではあったが、畿内の寺社や武士に対して精力的に編旨を發し、南朝の安寧祈願や所領安堵・給付、軍勢催促や褒賞を行なった。また九州に拠点をつくる。懐良親王(1139?~1139)は、南朝の将軍として、肥後国隈府(現熊本県菊池市)を拠点として征西府の勢力を広げ、九州における南朝の全盛期を築いた。

建武新政は瓦解したが、再挙を

図るべく後醍醐天皇は、まだ幼い懐良親王を征西大將軍に任命して九州に向わせたのであるが、九州への下向の時期については、延元元年/建武三年(1138)とも、延元三年/暦応元年(1139)か、またはその翌年か、とする諸説がある。親王は五条頼元らに補佐されて伊予国忽那島(現・愛媛県松山市忽那諸島)に渡り、この地の宇都宮貞泰や瀬戸内海海賊衆である熊野水軍の援助を得て三年も滞在したという。

薩摩に上陸して肥後に向かう

懐良は、興国三年/康永元年(1138)五月、薩摩国(現・鹿児島県)の山川港に上陸すると、谷山城主・父親の上杉憲房は鎌倉政権の打倒に貢献したが、建武三年(1138)一月、谷山隆信が一行を迎えた。この城に在って、北朝・足利方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後国(現・熊本)の菊池武光らを味方につけ、正平三年/貞和四年(1140)、菊池氏の居城、隈府城に入って征西府を開き、九州攻略を開始した。そのころ九州では・・・

北朝三代の天皇が即位する

正平三年/貞和四年(1140)に高師冬が執事(後の関東管領)として幼い基氏を補佐した。高師冬は高師直の従兄弟である。高師直は、北朝三代の天皇が即位する。正平三年/貞和四年(1140)に高師冬が執事(後の関東管領)として幼い基氏を補佐した。高師冬は高師直の従兄弟である。

鎌倉府の長官は

「鎌倉公方」は、征夷大將軍が関東十ヶ国の出先機関として設置した「鎌倉府」の長官に当り、「鎌倉御所」または「鎌倉殿」とも呼ばれた。当初、正式な役職名は「関東管領」で、これを補佐するため高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・

観応の擾乱

正平五年/貞和六年(1145)の二月に「観応」(北朝)に改元された。尊氏自身の子であるが、直義の養子となっていた足利直冬は西国で足場を築いたが、尊氏に従わなかった。直冬を討つため尊氏が中国地方に遠征すると、十月、その補佐として政務に復帰した直義は、京都へ脱出する。直冬は直義の求めにに応じた尊氏から北朝方の鎮西探題に任命される(但し南朝方は、興国七年/貞和二年八月、九州に下向した初代九州探題の父、一色範氏から譲られて探題と

南朝から追討令が・・・

吉野を本拠とする南朝の勢力は復活するかに見えた。しかし、南朝方は強気になったため和議は破談となり、再び尊氏は弟の直義を討つ事

親心の擾乱

正平五年/貞和六年(1145)の二月に「観応」(北朝)に改元された。尊氏自身の子であるが、直義の養子となっていた足利直冬は西国で足場を築いたが、尊氏に従わなかった。直冬を討つため尊氏が中国地方に遠征すると、十月、その補佐として政務に復帰した直義は、京都へ脱出する。直冬は直義の求めにに応じた尊氏から北朝方の鎮西探題に任命される(但し南朝方は、興国七年/貞和二年八月、九州に下向した初代九州探題の父、一色範氏から譲られて探題と

鎌倉府の長官は

「鎌倉公方」は、征夷大將軍が関東十ヶ国の出先機関として設置した「鎌倉府」の長官に当り、「鎌倉御所」または「鎌倉殿」とも呼ばれた。当初、正式な役職名は「関東管領」で、これを補佐するため高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・



天龍寺庭園

天龍寺は、大覚寺統(龜山天皇の系統)の離宮であった龜山殿の跡地に建設され、後醍醐天皇七回忌の康永四年(1345)、落慶供養が行なわれた。京都五山の第一として栄え、広大な寺域をもっているが、何度もの火災によって当時の建物は全て失われ、(特別名勝・史跡)にのみ創建当初の面影が残る。

直義は南朝方に・・・十二月に東国では、関東執事を務めていた上杉憲頭と高師冬とが互いに争い、憲頭は師冬を駆逐して執事職を独占する。直義方のこうの討伐を止めて備後から軍を返し、高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・

直義は南朝方に・・・十二月に東国では、関東執事を務めていた上杉憲頭と高師冬とが互いに争い、憲頭は師冬を駆逐して執事職を独占する。直義方のこうの討伐を止めて備後から軍を返し、高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・

直義は南朝方に・・・十二月に東国では、関東執事を務めていた上杉憲頭と高師冬とが互いに争い、憲頭は師冬を駆逐して執事職を独占する。直義方のこうの討伐を止めて備後から軍を返し、高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・

直義は南朝方に・・・十二月に東国では、関東執事を務めていた上杉憲頭と高師冬とが互いに争い、憲頭は師冬を駆逐して執事職を独占する。直義方のこうの討伐を止めて備後から軍を返し、高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は二転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。優勢だった直義軍は都に・・・

京都・鎌倉は南朝方の手に
 直冬追討令を得た。そこで義詮を京都に残し、東海道を東進して鎌倉に向かう。一方、京都を八月に脱して反尊氏勢力を糾合した直義は、上杉憲顕らの軍勢とともに西進して、十二月、東海道の難所だった駿河国薩埴峠(現・静岡県静岡市清水区)、相模国早川尻(現・神奈川県小田原市)などで激しく戦った。

二月十八日鎌倉に入り、十九日関戸で、二十二日は金井原(現・東京都小金井市)・人見原(現・東京都府中市)で足利勢と戦い、合戦では双方とも相当の損害を出したという。

器も無い状態だった。そこで足利も従ったが、後に尊氏方に付き、武蔵野合戦に参戦している。

近く鎌倉府の機能を移転させ、余りにわたって、尊氏、義詮の軍勢と激戦を展開した。しかし、主力の一角だった山名勢が崩壊したため、直冬方は破れる。直冬は洛中であつたが、三月、義詮、尊氏

後村上天皇は賀名生の行宮を発し、河内国東条(現・大阪府富田林市)を経て摂津国住吉(現・大阪市住吉区)に至り、閏二月十九日、山城国男山(現・京都府八幡市)に入った。

足利親王は信濃へ逃亡する。二十八日、足利勢と新田勢は、高麗原(現・埼玉県日高市)・入間河原(現・埼玉県狭山市)・小手指原(現・埼玉県所沢市)で相見え、合戦では足利勢が勝利、敗れた義宗は越後方面に、また宗良親王は信濃方面に落ち延びた。

鎌倉公方と其の補佐は... 鎌倉公方の基氏を補佐する執事としての、基氏は「入間川殿」と呼ばれた。観応の擾乱後の上杉が、正平八年／文和二年(1312)、氏勢力に対抗するため、この地に

この合戦では、足利政權の守護大名、佐々木道誉と赤松則祐(そくゆう、とも)の補佐をうけた義詮の活躍が大きかったという。最終的に、尊氏自らが率いた軍勢が直冬の本陣に突撃して勝利した。

この局地戦では激しい戦闘が繰り広げられたが、難波田勢は敗北し、九郎三郎と多くの部下が討死した(高麗経澄軍忠状)。現・埼玉県日高市の町田氏所蔵に書き留められている。ただし、その後尊氏と直義の和解によって難波田氏は復活して、再びこの地(現・埼玉県ふじみ市)で繁栄する。一方の高麗経澄は、さらに各地を転戦し、軍功を上げて鎌倉に入ったという。

この人、畠山国清 畠山氏は足利氏の支流である。薩埴山の戦いで弟の直義を破って、関東を奪還したが、この合戦では、関東執事だった上杉憲顕が直義方の南朝方と戦った。和泉、紀伊および河内の守護となつて畿内に勢力を拡張、観応の擾乱では、足利

入間川御陣に移る 正平八年、鎌倉公方の足利基氏は宿营地(「入間川御所」)を設置したので、基氏は「入間川殿」と呼ばれた。観応の擾乱後の上杉が、正平八年／文和二年(1312)、氏勢力に対抗するため、この地に

この合戦では、足利政權の守護大名、佐々木道誉と赤松則祐(そくゆう、とも)の補佐をうけた義詮の活躍が大きかったという。最終的に、尊氏自らが率いた軍勢が直冬の本陣に突撃して勝利した。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

南朝の後村上天皇は... 上記したように、正平七年／観応三年閏二月十九日、京都に入った足利義詮の軍を破り、南北朝の分裂後十七年振り京都を奪還したが、三月には足利方の反撃に遭い、都を放棄して山城国男山に立て籠もる。南朝軍は、北朝の光厳、光明、崇光上皇、直仁親王を男山に拉致した。五月、義詮軍の包囲から辛うじて脱出した後村上天皇は、三輪社・宇陀を経て、ようやく賀名生に帰還する。また、北朝の上皇たちを賀名生に連行した。

足利直義は死す 尊氏は直義の死後病氣勝ちで、政務は義詮を中心に執られていた。尊氏は正平十三年／延文三年(1314)四月三十日、京都二条万里小路第(現在の京都市下京区)にて、波乱万丈の生涯を閉じる。享年五十四才。直冬との合戦で受けた矢傷による腫れ物もとどという。尊氏は文人だった...

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。

足利直義は急死 尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年(1313)一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する(病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才。その後、擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたの、目は離せない。



http://ryobo.fromnara.com/palace/p096-4.html

吉野行宮の在った吉野山 ほぼ中央に金峯山寺の本堂(国宝・威王堂)が望まれる。吉野山を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」は世界遺産に登録された。

氏綱は、下野国宇都宮氏当主で、父が南朝側に仕えたのに対して、彼は足利尊氏の家臣となり、尊氏から偏諱(「氏」の字)の授与を受けて「氏綱」と名乗った。尊氏の下で武功を挙げ、鎌倉公方足利基氏の家臣となる。この時期の鎌倉府の体制は「薩埴山体制」といわれ、氏綱に与えられた上野・越後では、上杉氏や新田氏の支持者が新守護に反抗する可能性が高かった。そのため畠山国清は、入間川と鎌倉街道の交点